

生澤繁樹『共同体による自己形成—教育と政治のプラグマティズムへ—』

中西 亮 太

1. 本書の目的とその背景

本書は、2009年1月に名古屋大学に提出された博士学位請求論文『『共同体による自己形成』の再検討—現代の社会・政治哲学における共同体論的転回と教育学上の諸帰結—』に基づく。本書全体を貫く目的は、「自己は共同体によって形成される」というテーゼで語られる「共同体論的転回」の意義と諸相を分析し、教育学へのインプリケーションを探ることにある。ここでは、共同体主義思想を明らかにし、それをプラグマティズムと接続・対比させ、プラグマティズムの側から共同体主義の課題を乗り越えることでその目的が果たされる。本書は大きく三部から成るが、以下では、各部を抽出しつつ、本書から考え得る今後の教育哲学の課題を導出する。

簡単に「共同体論的転回」について説明したい。1971年、ジョン・ロールズが『正義論』を通して新たな自由主義を打ち出した。ロールズや彼に影響を受けた自由主義を批判する形で台頭したのが共同体主義である。共同体主義は、自由主義が①「正」と「善」を区別し、前者に優先性を与えること、②各人の善を公平に扱うための「中立的な手続き」を導入すること、③自己やアイデンティティを社会・共同体・他者関係に先行する「自律的主体」として想定することを批判する。共同体主義によれば、正は善と独立に定義することはできず、その決定は特定の価値に影響を受け、中立ではありえない。また、正を模索する主体のアイデンティティは本来的に社会や共同体の伝統・歴史・文化・実践・言語・自然・他者などとの相互関係に状況づけられて構成される。この批判以降、社会・政治哲学では共同体論的な主張を無視することはできなくなった……。

2. 第I部「共同体論的転回の教育学的諸帰結」

第I部では、本書の問題圏が明らかにされる。

第一章では、共同体主義者チャールズ・テイラーが民主主義のディレンマとして挙げた「包摂」と「排除」の構図が検討される。テイラーによれば、民主主義は最も包括的な政治形態を提供する一方、一定の相互理解・相互信頼・相互コミットメントという民主主義それ自体の要請から生じる排他的な力学を持つ。このディレンマに対し、人びとの差異の承認と対話に解決の契機がある。テイラーによれば、承認や対話が行われる公共圏は様々な公共圏が互いに入れ子状になって機能する公共圏の複数性のもとに成り立っており、もし民主主義を検討するのであれば、それを支える公共圏の複数性を捉えた再構築が求められる。テイラーの考えを受け、著者は民主主義による包摂の実現には単一の枠組みを想定する理論では十分な応答ができないことを結論づける。

第二章では、第一章で取り上げた承認に対する牽制と一つの方略が検討される。著者に従えば、テイラーの承認論は人びとを共約不可能な個人、特異な共同体に属した個人として捉えるその平等観に意義がある。この平等観は公共圏を二つの意味で脱中心化する。一つ目は「政治権力の脱中心化」であり、中央集権的権力を地域の共同体に割り当てることを可能にする。二つ目は「公共圏そのものの脱中心化」であり、単一的な空間として措定される従来の公共圏モデルに対し、多元的な公共圏モデルの志向を可能にする。ここからテイラーは入れ子状になった公共圏の複数性に向けた脱中心化を提案する。すなわちそれは、大小複数の公共圏が入れ子状に重なり合って、政治構造と相互に影響を及ぼし機能するネットワークとしての公共圏の構想である。

しかし、以上の承認論によって擁護される「差異」はその特性として一定の文化的中心性を要請する。そのため、個人や集団の境界の流動性の意義や排他的な力学という問題がまたもや現れる。ここにおいて多元的な公共圏の創造を目指しつつ、差異を支える社会構造や差異の存在そのものを基底から考察する必要が発生する。

第三章では、テイラー同様、共同体の文化や宗教の多様性・多元性を擁護するマイケル・ウォルツァーに焦点が当たる。ウォルツァーは正義の普遍性を掲げた「単一平等」に対し、分配の領域が（ α ）その財ごとに、（ β ）社会・文化・共同体ごとに、異なる分配メカニズムを持つことを認める「複合的平等」を主張した。

このウォルツァーの平等論を教育に応用すれば、たちまちパラドクスが生じると著者は考える。第一に、本来「善き生」が論争的なものであることを踏まえれば、その実現に関わる「教育」という財の意味付けも論争的となる。では教育の社会的・文化的意味を解釈する主体とは誰か。このとき教育はともすれば一定の共同体や特定の人びとの意識を不当に促進することとなる。第二に、特定の社会・文化・共同体による教育の意味解釈の相違に配慮することで、逆説的にその社会・文化・共同体の内部の人びとの不平等がますます大きくなるという問題がある。これは共同体内部の権力関係の非対称性から生じてくる。

この二つのパラドクスに対し、「解釈学的な会話の継続」「理解や認識の枠組みを変容させる学び」に応答可能性がある。筆者はこれらをテイラーの「地平融合」の中に見出す。互いの理解の地平のせめぎあいの中で、自らの多様な解釈や意味の地平それ自体を変容させる学び、すなわち特定の地平からの視界や自らの有限な規定に拘束される人びとの理解と視野は、共約不可能な他者・他文化との融合によって変容し、再獲得される。

3. 第Ⅱ部「共同体による自己の形成の諸相」

第Ⅱ部では、第Ⅰ部を受け、テイラー思想から自己形成の諸相が導かれる。

第四章では、テイラーの自己形成論にある近代自然科学批判に焦点が当たる。近代的自己は、自らを理解し説明する中で、自身の背景となる地平や枠組みを客体化することで自己を自然主義的説明の対象とする。具体的な文脈から遊離したこの主体からは「アトミズム」が帰結するとテイラーは述べる。ここでアトミズムとは、個人を抽象的で中立的な「点」のような存在と見なす立場である。しかし、このアトミズムでは自己解釈によって自己が形成されると

いう重要な点が見落とされてしまう。テイラーは、自己の獲得は「意義の判断」、すなわち絶えず自己解釈やその解釈を支える言語を再評価する中で行われると考える。ここで着目されるべきは、言語は言語共同体で形成され、自己は「相互対話の網の目」に埋め込まれており、本質的に対話的であるという点である。

ここで著者は自己と善概念の考察に移る。テイラーは個人にとって最も価値ある善を「最高次の善」と呼ぶ。この最高次の善はそれに向かうことに重要性があると見なされるもので、他の善を熟考する立脚点となる。テイラーは最高次の善の多様性・多元性を指摘すると共に、それらは社会的・共同的・公共的な次元、すなわち間主観性や共通性の次元を有すると考える。著者はここに、共通性を有する何らかの善との関係づけによって構成され、対話や言語共同体という状況内に位置づけられた主体として自己を捉えようとするテイラー思想の意義を見出す。

第五章では、テイラーの「反自然主義」に着目される。著者はテイラーの反自然主義的自己形成論にロマン主義の表現主義的な自己理解の影響があると考える。すなわち、何らかの道徳的源泉は自己の内面から生じる声や衝動、内なる深みにあり、これらが善を定義しているという考えである。テイラーは、人間には以上のような独自の存在の仕方があるがゆえに言葉や行動のうちに各々の独自性が表現される、そして共同体の言語がこの自己表現を可能にすると考える。

著者は反自然主義に基づく自己形成というこの文脈を読み解いてこそ、テイラーの承認論を教育学的に引き取ることが可能となると言う。しかし、ここには近代ロマン主義が孕むナショナリズムや愛国心といった問題が出現する。著者はこの問題について、自己の内面性の強調はルソウ的な「自然」の呪縛であり、テイラー自身が危惧した「専制」を導く可能性があることを同時に指摘する。

第六章では、第五章で示された問題を乗り越える前段としてテイラーとジョン・デューイの比較が行われる。著者は先行研究に基づき、デューイが一方では価値の共有や人間相互のコミットメントといった共同体主義の理想を認め、他方では自由や平等、民主主義といった自由主義的な観念の深化を目指す「共同体論的自由主義」であるとする。そしてこの

共同体論的自由主義という立場はテイラーにも共通すると言う。

一方、テイラーにはデューイと異なる視点もある。テイラーは自己形成が最高次の善との関係の中で生じると考えた。しかし、デューイは究極の善の存在を批判した論者でもある。とはいえ、テイラーは、この最高次の善を通して単一の固定されたものを特権視するのではなく、その地位と序列の変更可能性を示唆しており、これは自己解釈やそれに用いられる言語を再評価する中で果たされると考える。著者はテイラーがデューイを引き取らず、またリチャード・ローティがデューイを引き取った原因をこの善の地位・序列観に求める。しかし、この点にこそデューイを自由主義の系譜に位置づけたローティに対し、共同体主義の系譜に位置づける契機が含まれていると言う。

4. 第Ⅲ部「プラグマティズムへの回帰？」

第Ⅲ部では、第Ⅱ部でテイラーとの接点が見出されたデューイに焦点が当たる。

第七章ではデューイの「知性」と「探求」に注目される。デューイは、民主的な制度や共同体の実現には、時々直面する問題を通して社会を変容にさらし、その変容を善い方向へと統制し、批判的な思考・施行・反省を続けていく知的対処としての探求の精神が必要であると考え。デューイはこの知性や探求を自己と共同体の和解、すなわち個人の解放と社会の再構築に適用する。知性が社会の統制に採り入れられるとき、それは「力」となり、共同体を民主的なものに変化させる。以上から著者は、共同体主義的教育論は人格形成や市民形成よりも、知性による批判・反省に光を当てる必要があることを説く。これによって教育への素朴な信頼、あるべき人格や市民の形成といった近代教育の概念の問題性が認識可能となる。

この知性と探究のプロセスはデューイの「終わりのなき成長」という思想へと結実する。ローティはデューイを「反基礎づけ主義」の立場と理解したが、一方で「何に向けての成長か」となれば批判的に問うこともできる。第八章ではこの反基礎づけ主義に焦点が当たる。

著者は、齋藤直子によるエマソンの道徳的完成主義に基づくデューイ解釈を取り上げる。「道徳的完

成主義」とはより善さを求め、無限に達成され続ける完成の過程を目指すものである。ここでは、完成に関する基礎が幾度も発見され、新たな完成の可能性が繰り返し創造されることとなる。すなわち、道徳的完成主義に基づけば、成長の目的は漸進的に形成されていくほかないのである。

著者は、探求に伴う帰結の良し悪しは事後的に把握されるに過ぎず、デューイの知性や探求を鑑みれば、不可逆的な不幸な事態も可変的な問題として再発見されると考える。このような理解は一種の不安を導くものであり、実際デューイ批判として「反-反基礎づけ主義」のような立場も登場した。こうした反動に対し著者は、齋藤のようにデューイを反基礎づけ主義として強く解釈していくよりも、彼の思想が実践で機能する様子を見せることが重要であると言う。つまり、デューイ的探求の事例を挙げ、それを詳細化・明確化することでのみデューイの思想を補強・擁護することが可能となると考える。

第九章ではデューイの文化論に焦点が当たる。本章は第八章で述べられた実践の在り様を示すものとして捉えることができるだろう。

デューイの主眼は社会や共同体の生活が単一性・同質性・同一性から構成されるという誤解を解くことにあった。デューイは、社会や共同体の諸集団は規範・慣習・目的・習慣を成員に伝達・再生産することで成員の生活の更新を果たすと考え。ここでは、個人の思考・行動・感情が織りなす「習慣」が既成の社会的な「慣習」に基づく環境や状況の中で形成されるだけでなく、習慣の修正を促すことで慣習そのものの存続を可能とする。一方で、デューイはこの慣習を不動の枠組みとして捉えることを批判した。社会の成員が持つ生来的な活動には、適応・同化・再生産に作用するものもあれば、探索・発見・創造に進むものもある。デューイは後者の中に見られる「衝動」に着目し、これが知性によって役立てられたとき慣習の再組織を可能にすると考えた。

著者は以上のようなデューイの文化論から、慣習と習慣をいかに知的に変容させるか、衝動をいかに知的に制御するかという問いを立てる。そして、文化を尊重することが特定の文化・伝統を教え込む近代的な教育を要請するという点に注意を払いつつ、ふさわしいコミュニケーションの在り方を教育に再編することで文化の経験を拡大させ、文化の問題の見方を変容させることを可能にすると考える。

5. 今後の教育哲学の課題

以上、本書が多文化的状況に伏在する単一化・同質化・同一化の枠組みをプラグマティックに問い直し、更新と再創造の視点から伝達と再生産に説明と筋道を与えるものとしてデューイを跡付けるまでを見てきた。最後に、本書から導かれる教育哲学の課題を提起したい。

本書は共同体論的転回を引き受け、共同体主義の検討から開始された。一方、共同体論的転回以後も自由主義は社会・政治哲学において依然主軸を成していると言える。本書では自由主義の立場として『正義論』期のロールズの議論が中心に扱われていたが、その後ロールズは『政治的リベラリズム』に結実するような「政治文化」を見出し、間主観性に基づく「合意」を打ち出している。このような共同体論的転回以降の自由主義は教育学にいかなる理論を提供するのだろうか。それは本書で提起された教育論とどのような違いを持ち得るのだろうか。

また、本書の内容についても一層深める余地があると考えられる。著者の主張は、ある種の知性や知識を伴う思考と探究によって共同体の変容を目指す「プラグマティズム化された共同体主義」である。しかしここで、「共同体の変容はいかにして導かれるのか」と問うことが可能だろう。著者は集団や文化の多様性を認めるだけでなく、その内部における個人の多様性を強調していた。では、この多様な諸個人はいかにして共同体の変容を実践するのだろうか。この共同体の変容は、特定個人による聡明な発見や統率力によってもたらされるのか、あるいは個人間の合意をもとにして行われるものなのか、あるいは別の論理で生じるものなのか……。

本書の批判的な検討を行いつつ、教育学や社会・政治哲学内部の布置を更新する道を探ることを教育哲学の課題として提起し、本稿を閉じたい。